

平成30年11月30日(金)

老球の細道450号

## 11月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今月は今は亡き父母の命日。両親とも今際の会話がないまま逝ってしまった。お墓の前で親が最後に話したかった言葉を想像しながら、生きているうちにもっとたくさん会話をしておけばよかったと悔いた。山田洋二監督の家族を扱った映画に涙する11月だった。

### 1・映画、テレビから

#### ◆「良い芸術家は模倣し、偉大な芸術家は盗む」〈ピカソ・映画『パワーゲーム』

スペインのマラガにある「ピカソ記念館(ピカソの生家)」を見学したことがある。初期の頃の画はごく普通。あのピカソ独特の画は色々な画家の絵からのパクリ。創造、独創は模倣、パクリから生まれる。バスケットのスキル、戦術も同じ。そっくりさんではなく、「盗むならその人の考え方を盗め」ながらオリジナルを創り出すことが快感である。

#### ◆「男はバイタリティーを持って何かを極める。ユーモアを持ってやさしくあれ」

#### 〈NHK・BS・ザ・プロファイラー『チャーチル・不屈の勝負師』

世界の実業家が尊敬するNO1指導者は英国のチャーチルだという。何回挫折してもあきらめない。自分のスタイルを変えない。演説は常に周到な準備をして原稿など見ないで行った。ピンチになればなるほどユーモアを忘れなかったという。コーチもそうありたい。

### 2・読書から

◆「会社に定年はあっても人生に定年はない」〈『定年前後のやっちはいけない』郡山史郎・青春新書〉:「もう用はありませんよ!」と宣告されて学校職場から退場して5年。人生からはまだ退場宣言はないようなので、他人様に迷惑をかけないように、願わくば棺桶に片足を突っ込むまでバスケットボールのために役に立てれば幸いである。

### 3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「人生は非常に難しいもので、これ以上は言葉にできないってこともいっぱいある。でも、難解なことを難解な言葉で書いている限りは、その人が至っていないんだろう」〈朝日・文化文芸欄・宮本輝〉:作家の井上ひさしも言っていた。「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く、面白いことを真面目に」。バスケットボールのコーチング、ティーチング、メニュー作成の原理原則でもある。

#### ◆「欠点を直すことに一生懸命にならない」〈朝日・折々のことば・羽生善治〉

やる気のない子どもに注意を向けるとイライラがつのる。やる気で来ている多くの子どもたちの時間が奪われる。指導者のイライラがやる気のある子どもたちのやる気も奪う。やる気のある子どもたちを元気にさせ、やる気のない子どもを流れに巻き込んでしまう。

#### ◆「心の綱引きが、思考の筋力を育てる」〈朝日・加藤登紀子のひらり一言〉

反対意見が気づきを与える。迷いがなければ自分の考えが深まらない。

◆「立川談志という人は心底、稽古が好きな噺家だったんですね。千利休の言葉にある“稽古とは一より習い十を知り十よりかえるもとのその一”を常に実践していた」〈週刊現代『天才・立川談志を語ろう』〉:何事も楽しんで努力している人にはかなわない。どんなに上達しても慢心することなく基本に還ることは凡人にはできない。アスリート教室にも毎年基本を学びなおしに来る子ども達、コーチがいる。会津バスケットまだ大丈夫。